

「これならできる！」ならびっこキックベース

— 小中学部 体育授業 —

大阪精神医療センター分教室

1 はじめに

本分教室は、身体を動かすことを得意とする児童生徒が多く在籍している。しかし、個々の特性や成育環境により失敗やできないことに対する恐怖心が強いいため、新しいことに取り組む際に慣れるまでに時間を要する。また、できないと感じた際には競技への参加をあきらめてしまう。また、勝敗にこだわるあまり、他児に対して厳しい口調で指示を出すことや、責めてしまう場面が度々ある。一方、体育が苦手な児童生徒は、以上の理由に加えて、運動経験が少ない。よって、個々の練習にはなんとか参加できるが、試合形式に参加することが難しく消極的であった。

そこで、ならびっこキックベースであれば、ルールが比較的わかりやすく、球技が苦手な児童生徒も参加できる競技ではないかと考え昨年度から取り組み始めた。本稿ではその実践について報告する。

2 ならびっこキックベースルール

図1を参考に、わかりやすく、全員が参加できるようにするためルール変更を行った。次の①～⑩が本分教室のルールである（図2）。

- ①守備は蹴られたボールを捕り、捕った人の後ろに並んで座る。
- ②攻撃は守備が座るまでに一塁側に並んでいるコーンに向かって走る。3つ目のコーンで折り返す。
- ③ノーバウンドはアウト。
- ④ファールラインを越えた場合または、ボールラインを越えない場合は蹴り直し。
- ⑤全員が蹴り終わったら攻守交替。
- ⑥得点は守備が並び終えた際に、越えているコーンの得点になる。
1つ目3点、2つ目5点、3つ目10点、折り返し1つ目15点、ホーム20点。
- ⑦キッカーに蹴りやすくするため、ピッチャーはチームに属さない教員が行う。
- ⑧ノーバウンドアウト以外では、必ず得点が入るようコーンまでの距離を調節した。
- ⑨児童生徒が意識するラインを減らし、走る目標をカラーコーンにし、わかりやすくした。
- ⑩教員もチームに入り、苦手な児童生徒への声かけも行い、児童生徒と一緒にプレーし、見本となるようにした。

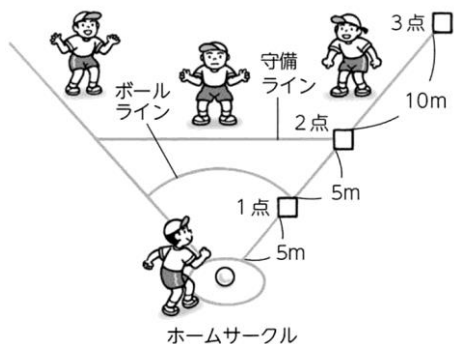


図1 参考にしたルール

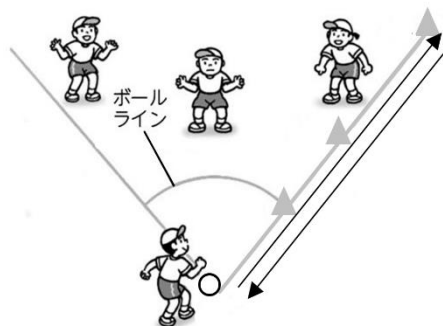


図2 本分教室ルール

I 実践報告

3 授業の流れ

ならびっこキックベースを行った全6時間の授業の流れと内容は次の通りである。

本分教室の児童生徒は、説明を聞くことや基礎練習よりも、試合形式を行うことで興味関心が高まり、ルールを理解やボールの扱い方の上達が速い。そのため、試合形式を多く授業に取り入れた。

授業の流れ・内容	
1. ランニング 3周 2. ラジオ体操 3. <u>メイン</u>	<p>〈メインの内容とポイント〉</p> <p>1 時間目、2 時間目</p> <p>【ボールに慣れる】</p> <p>個人で行う練習や遊びを通してボールが怖くないこと、自信がない生徒も参加できる練習を積み、自信をつける</p> <p>①ドリブル練習</p> <ul style="list-style-type: none">・ボールを扱えるようにする・ボールに当たる位置を確認する <p>②パス（苦手な生徒は教員と組む）</p> <ul style="list-style-type: none">・目標に向かってボールを蹴りだす・思ったところにボールが蹴れることを知る <p>③ボール取り（円の中に一人入り、ボールを取られないように回りの人でボールを保持するゲーム）</p> <ul style="list-style-type: none">・遊びの中で少し早いボールを蹴れるようにする <p>3～6 時間目</p> <p>【試合形式】</p> <p>できそうなところから促し、試合に参加する</p> <p>試合形式が難しいものではないことを知る</p> <ul style="list-style-type: none">・得点した時、チームに入っている教員を筆頭に喜ぶ・ピッチャーの教員は、児童生徒を見て投げる速さや場所を変え、ボールをとらえやすくする・児童生徒の習得度に合わせ、声掛けを変える (例：「投げるのがはやかったね」「もう少し早くけてみよう」など)

4 児童生徒の反応

取り組みをはじめた時には、消極的な児童生徒が多くいた。例えば飛んでくるボールを受け止められるかなど、失敗を恐れている様子がみられた。しかし、近くの教員に「先生の後ろにいてもいい？」と言って練習を続けることができるようになってきた。また、相手に点数を多くとられないために、ボールが飛んだ方向に動くことを理解し始め、徐々に攻撃側がボールを蹴ってから動き始めるまでの時間が短くなってきた。すると、得意な児童生徒がチームに複数人いるように構成していたことで、動けない児童生徒に指示を出したり、優しく声かけをしたりする様子がみられた。

勝敗がつく競技であるため、当初は試合結果に対して他児に対して厳しい口調や責める

I 実践報告

言葉もみられた。しかし、得意な児童生徒は、早くボールを取り座れることで、自分が並ぶ基準になり得点を抑えることができるなどの役割があり、チームを引っ張っていくことができる。また、苦手な児童生徒は、できないから適当にするのではなく、チームのために一生懸命走り、ボールを追いかける姿がでてきた。その姿をみて、「頑張ったね」「すごい」と優しい声掛けをするようになった。頑張っている児童生徒に対して厳しい声が上がった際には、「頑張ってるのに、なんでそんなきつく言うの」「一生懸命やってるやん」と頑張っていることを認めようとする雰囲気が見られるようになった。また、得意な児童生徒が率先して、「ここは私が守るから、あっち守って」「よく飛ぶから後ろに下がろう」などの作戦を声に出して周りに伝える様子もあった。運動が得意不得意はあるが、それぞれが役割を理解して動くことで、チームとしてまとまりお互いに協力して試合を行うことができるようになった。

5 最後に

通常のキックベースボールは、走者が出た際に最大4人、両チーム合わせて8人必要である。本分教室では在籍が少ないこともあり、体育では8人以上の参加が少ないことがあった。そのため少人数でできるキックベースボールを検索していたところ、ならばっこキックベースの実践や指導アイデアを見つけた。そして、本分教室の児童生徒が取り組みやすくするため、ルールを変更した。ルールを早く理解し周りの児童生徒に教えようとする姿勢が見られ、その上で新しいルールを考え提案することもあった。球技が苦手な児童生徒は、得点を取ることができ「これならできる」と参加できるようになった。

本分教室において児童生徒に対して面談を通してアセスメントを実施する際に使用している「わになるシート」の集計結果を分析した。その結果、「運動が好きですか？」の質問項目について、令和2、3年度の集計結果では、運動が好きではない児童生徒が多かった。しかし、令和4年度においては、運動が好きな児童生徒が大幅に増えた。

また、ならばっこキックベースを授業の中で行った教員から、令和5年度の運動会の種目にしたいと提案があった。試合形式が苦手な児童生徒も参加でき、児童生徒同士協力している様子が教員にも伝わっていた。

体育の授業では「体育は得意な人がやる授業やろ」と言われることが多々ある。私自身体育が「好き」ではあるが「得意」ではない。しかし、好きであるから楽しいと感じ、うまくできるようになりたいと考えていた。本分教室の児童生徒は特に、できないことへの恐怖心があるため、運動に対する恐怖心を取り除けるようにスモールステップで授業を組み立ててきた。初めから得意でできる人もいるが、多くは興味関心から始まる。技術の差が明らかになってしまう体育の授業で、在籍の児童生徒の技術力を均等にすることは難しいため、「できない」ことが怖い本分教室の児童生徒は積極的に参加できない。しかし、授業次第で取り組み始めることができるようになる。どのように「できるかもしれない」「これならできるかも」と思わせられるかを考え、小さな「できる」を積み重ねたことがわになるシートの結果として現れたと感じた。今回のことを生かし、今後も「得意な人がやる授業」ではなく、「楽しく身体を動かす授業」をめざし、楽しめる競技や授業ができるよう努力していきたい。

参考文献：

①小3体育「ベースボール型ゲーム」指導アイデア | みんなの教育技術

<https://kyoiku.sho.jp/103793/>